

令和6年度

ふるさと常陸太田の歴史散歩

令和6年9月29日(日)

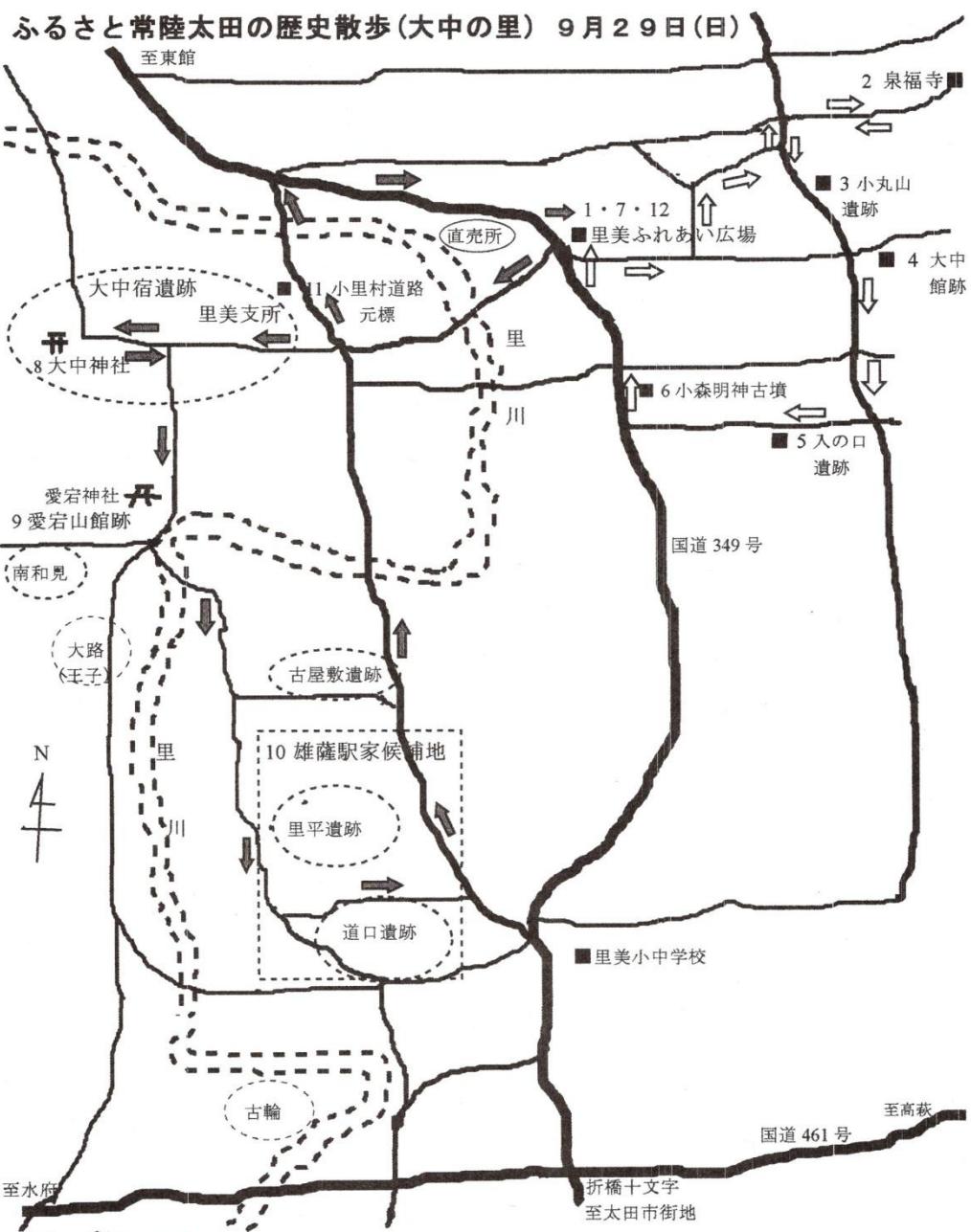
## 第1回『大中の里めぐり』



大中神社 拝殿

主催：常陸太田市生涯学習センター

共催：常陸太田まちかど案内人の会



<日 程> 8:30

1 里美あれあい広場 ⇒ 2 泉福寺 ⇒ 3 小丸山遺跡(高齢者生産活動センター) ⇒ 4 大中館跡 ⇒  
 9:50 10:30 11:00 11:15  
 ⇒ 5 入の口遺跡 ⇒ 6 小森明神古墳 ⇒ 7 里美ふれあい広場(昼食・休憩) ⇒  
 11:30 11:50 12:00-12:40  
 ⇒ 8 大中神社 ⇒ 9 愛宕神社 ⇒ 10 雄薩駅家候補地 ⇒ 11 道路元標 ⇒ 12 里美ふれあい広場  
 13:20 13:50 14:20 14:50 15:00

## 1. 泉福寺 曹洞宗 大中町 1265

かつて、小里地域が岩城領であった中世末期。現在泉福寺がある場所には、岩城氏の一族で小里城主であった白土右馬之介により、菩提寺として曹洞宗松安寺が建立されていた。松安寺は岩城氏が改易された後も、1,200 人の檀那と 4 つの末寺を持つなど、隆盛を極めていたが、寛文年間に行わられた徳川光圀公の社寺改革によって廃寺となった。その後、檀那寺を失ってしまった近隣住民の強い要望があり、貞享元（1684）年、松安寺跡地に小木津村（現在の日立市）より、曹洞宗大雄院末寺である医王山泉福寺を曳き移して現在に至っている。境内には応永年間(1394-1428)に開山され、万治 2(1659)



年に他所より移された薬師堂と、樹齢約 300 年を誇る茨城県指定天然記念物のしだれ桜がある



薬師堂

### 泉福寺のしだれ桜

このシダレザクラは曳寺された際に植樹されたものと考えられており、茨城県の天然記念物に指定されている。その推定樹齢は 300 年、根回り 4 メートル、目通幹囲 3.5 メートル、高さ 20 メートルと、茨城県内でも有数の樹勢を誇る巨木として、古くから多くの観光客の目を楽しませてきた。

通常、シダレザクラと聞くと、傘のような樹形を思い浮かべるものですが、このシダレザクラは途中から二股に分かれしており、あたかも丁寧に手を掛けた盆栽のように、どの角度から見ても美しい樹形を目にすることができる。

なお、枝先から主幹にかけて空洞ができてしまったことから、平成 8 (1996) 年に樹勢回復のための外科手術が施されている。



## 2. 小丸山遺跡 こまるやま

高齢者活動センターを作るため造成中、須恵器製の蔵骨器が出土した。当時の話によると蔵骨器のまわりは炭でおおわれていたという。この蔵骨器は、高さ21.2cmで蓋のついた立派なもので、灰釉がかかっていた。中には火葬骨が入っていた。この蔵骨器のように、火葬骨を壺に入れる風習は、仏教伝来後おこなわれるようになったものである。火葬の初めは、記録によると、700年に僧道昭がおこなわせたもので、奈良、平安時代には僧、貴族を中心にひろく流行した。小丸山遺跡の蔵骨器は、平安時代にそのような風習が里美地方にも伝わってきていたあかしとなるものである。



大化の革新によって、朝廷を中心とした国家ができると、朝廷は中央と地方との結びつきを密接にするため、駅家・伝馬の制度をつくり、七道（山陽道、山陰道、東山道、東海道、北陸道、西海道、南海道）諸国に通じる各道跡には、30里（約16km）毎に、<sup>うま や</sup>交通事務をつかさどる駅家をおいた。常陸国内では、はじめ、国府から海側の道を通って陸奥国へ行ったが、弘仁3年（812）からは山田駅、雄薩駅、田後駅がおかれ、山の道を通って陸奥国へ行くようになった。この駅家の場所には諸説があるが、この小丸山遺跡からの遺物からみても近くに官道が通っており、駅家があったのではないかと思われる。

おおなかかんあと  
**3. 大中館跡**

大中館は、常陸太田市大中町字館にある。国道349号線の東側、里美支所から約800メートルほど、田んぼを挟んで、標高差25メートルほどの台地が大中館跡である。

大中館は、竜蓋城（りゅうがいじょう）とも呼ばれている。竜蓋の名は地名として今も使われている。

大中館が作られた時期や、誰が大中館の主だったか、など詳しい資料や言い伝えは残っていないが、奈良、平安時代と推測される。

規模からみてみると、旧里美村地域では最大の規模を誇っている城郭と推測される。山頂部に、一辺30メートルの三角形をしている郭から9個の郭で構成されている山城である。ただ、土壘の作りや、城郭周辺の切岸加工は甘く敵の侵入を簡単に許してしまう作りとなっている。事が起こった時に、立て籠った砦だったのかもしれない。普段の生活は、城郭から降りた平地で営まれていたと推測される。

興味が有る地名に工入り（たくみいり）が有る。モノづくり集団がいたと思われる。高萩の海岸からくる、塩の道を通って砂鉄が運ばれ、製鉄をし、棒クワの一大生産地だったことである。棚倉街道や塩の道を通って、各地へ物資を送り出す、物流拠点だったと推測される。



大中館跡

## 4. 入の内遺跡 いり うちいせき

入の内遺跡は、常陸太田市大中町字入の内にある遺跡で、多賀山地より西に伸びた小扇状地にあり、南北 100 メートル、東西 100 メートルの範囲に及んでいる。塚状の集石地点が存在し、地元には、墓跡ではないかと言う、言い伝えが残っており、古墳である可能性が有りうる。

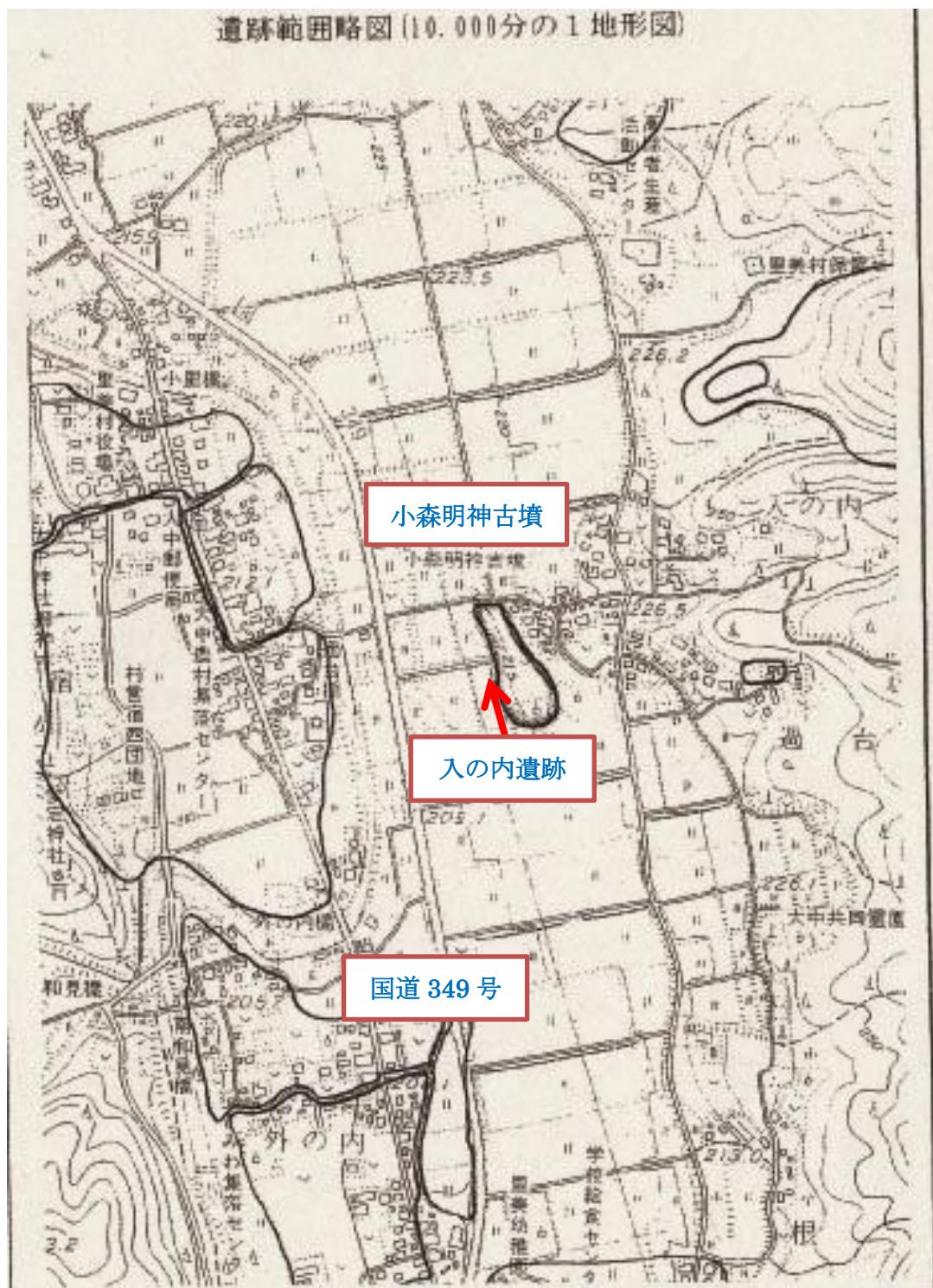
作られた時代は、奈良、平安時代と推測される。誰が何のためにこの地に作ったかは不明である。

平成 11 年 3 月 30 日に発掘調査が行われ、土器片（土師器片）、鉄滓（てっさい）が出土している。

### \*鉄滓（てつさい）の説明

たら製鉄は、砂鉄と木炭を炉にいれて燃焼し、砂鉄を還元して鉄を製造する。高温で熔融した時、砂鉄中に含まれる不純物は、スラッグ（鉱滓、ノロ）として排出される。このスラッグを鉄滓と言う。





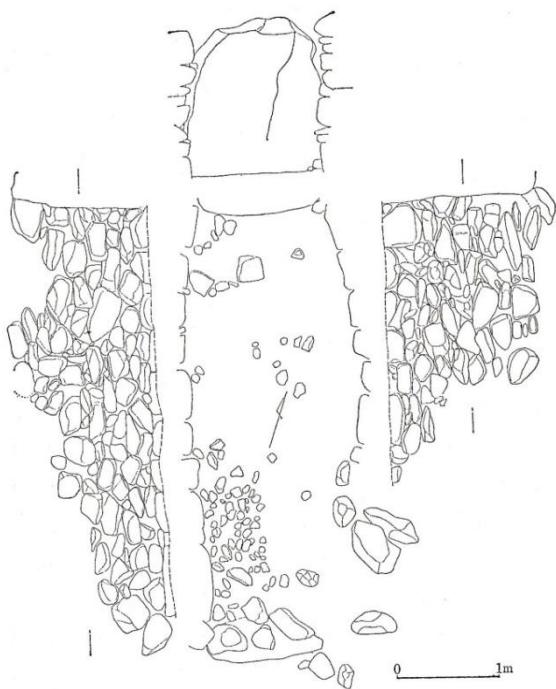
## 5. 小森明神古墳

常陸太田市指定文化財

小森明神古墳は、大中字小森655番地に所在する。古くからの盗掘、土取り、圃場整備などで、旧形が変えられたので、昭和52年8月、発掘調査が行われた。墳丘は、墳頂部を中心として2分の1ほどが残っており、墳頂部標高は213.5m、高さ約4mほどの円墳であることが確認された。主体部は、無袖形横穴式石室で、主軸はN-21°-Wに置かれ、南に向かって開口する。

石室は、花崗岩の自然石で構築されていて、全長4.5mあり、玄室部2.5m、羨道部2mとに二分される。幅は1.3m前後で、やや胴張りをもっている。奥壁は、高さ1.5m、幅1.3m、厚さ0.4mの一枚岩を小口積みにしている。天井石は5枚が確認されたが、いずれも原位置を離れていた。床面はほとんど攪乱されていたが、閉塞石下には一部、拳大の石が敷かれてあった。副葬品としての遺物は、直刀、鉄鏃、横よこべ、ガラス玉、土製管玉が出土している。

小森明神古墳は古墳群ではなく、一基のみの築造であり、県内でも少ない無袖形横穴式石室である。築造の時期は副葬品からみて、7世紀中頃と考えられるが、県北山間地内のせまい平坦部に築造された古墳として、重要な意義を持っている。



第12図 小森明神古墳石室実測図



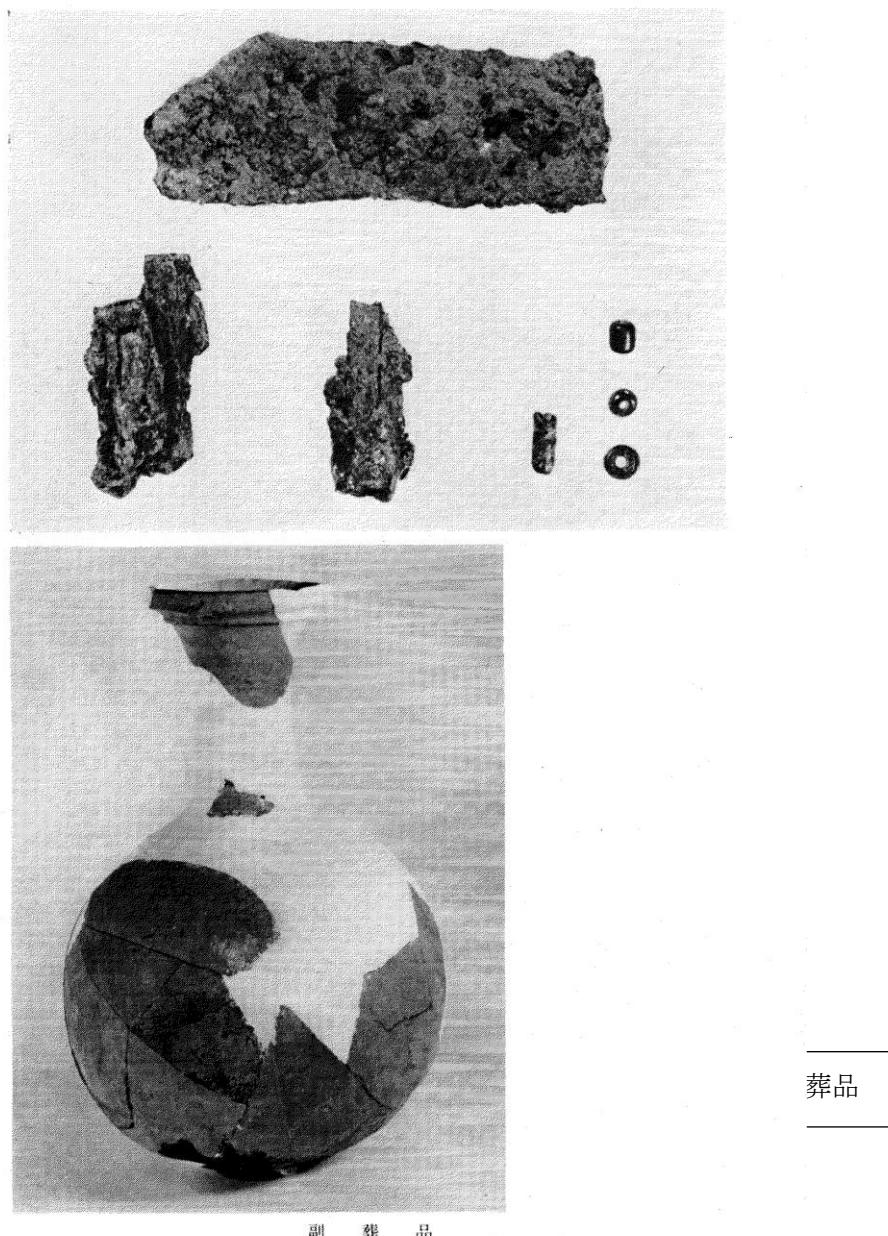
小森明神古墳

石室実測図

## 遺物

小森明神古墳から出土した遺物は、主体部からは直刀、鉄鎌（やじり）などの武具類・横糞（かめ）・装身具、近世小銭の一部が出土し、墳丘からは縄文式土器、土師器、陶器、近世古銭が出土した。前述したように数度の盗掘により玄室床面まで搅乱されており、古墳に伴う遺物で原位置を保つものは全くなく、「昔、掘り出した遺物は再びうめもどした」という地元の人々の言葉どおり、一ヶ所にまとまって出土している。古銭は、石室内、封土上面など、大中神社の祠付近に集中的にみられ、石室内のものは、以前の発掘の際、入り込んだものと考えられる。

昭和52年8月 小森明神古墳調査報告書より抜粋



副葬品

葬品

## 6. 大中神社

祭神：大日貴命（おおむなみのみこと） 配神：少彦命（すくなひこのみこと）

由緒は、大同2年（807）11月15日の創建と伝えられる。後、永承6年（1051）八幡太郎義家が奥州征伐の時（前9年の役）館籠地（たちこもりち）字小森に「大宮大明神」を建立し、戦勝を祈願したという。

古記録によると、応永以前は大中宿よりみて過台坪の東山館の台に同社の別当寺であった真言宗隆真院とともにあったが火災にあい全焼してしまった。その後、隆真院は応永元年（1394）古内（現在の大中神社の境内）に再建された。大宮大明神は正長2年（1428）滝沢山（現在の荒蒔氏の屋敷）に遷祀されたと記されている。寛文6年（1666）から実施された光圀公の社寺改革により、里美地区の最有力寺院であった隆真院は破却され、その跡地に元禄12年（1699）滝沢山より大宮大明神を曳宮し、小里郷9ヶ村（里川、徳田、小妻、小中、大中、折橋、小菅、大菅、黒坂（日立市））の総鎮守となした。

同社は、佐竹氏が秋田へ移封された直後の慶長7年（1602）末、家康より当地区では破格の朱印地45石を与えられている。明治6年（1873）4月には村社となり大中神社と改称し現在に至っている。

大中神社本殿（市指定文化財）

本殿は江戸時代中期の享保9年（1724）に建造され、材料は総檜で、屋根は入母屋唐破風造りであり、幾重にも積み重ねられた杁組の土台、豪華な色彩が施された彫刻、屋根の曲線美などが施された旧里美村内では豪華さ、優美さを備えている。



### 大中宿遺跡

ここ大中神社と支所のあるところは、大中宿遺跡という。  
ここからは経文が書かれた石が見つかっている。（経石塚）

## 大中神社の御神木

この御神木は杉としては旧村最大級であり、元禄時代に廃寺となった真言宗隆真院からの境内木であろうと推定される。

目通周囲 4. 9メートル

樹高 53メートル

推定樹齢 約400年



## 白石父子の顕彰碑

水戸藩郷士。安政5年の勅書降下以来、父子共に国事に奔走し、文久元年（1861）正月出府の途次、新治郡稻吉駅において反対派の徒に襲われ、父子共に鬪死した。

父 白石 平八郎（へいはちろう） 享年 50歳

子 白石 内蔵進（くらのしん） 享年 30歳



題字 品川 弥二郎（子爵）

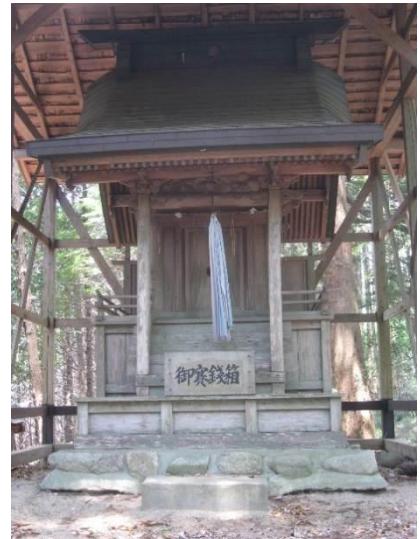
撰文 野口 勝一（野口雨情の伯父、

衆議院議員を務める）

## 7. 愛宕山館跡

大中神社から500m程南の比高60m程の山上に愛宕神社があり、いばらきデジタルまっぷに、遺跡名「愛宕山館跡」(大中2708、2710-1外)と記載されている。

当地を城館跡とする記録や伝承は見当たらないが、北西方向に延びる尾根を除き急峻な崖で隔絶された山地は、土壘・腰曲輪・切岸等々館跡らしい形態が見られ、往古の館を彷彿とさせる。愛宕神社の建つ山上の平地は、低い土壘がほぼ全周しているが館としては余りにも狭く、監視・連絡の見張り台、又は大中宿住民の避難地であったのではと推察される。



山上の愛宕神社



南側の赤い鳥居



8. 雄薩の駅家  
おさつ うまや

厩牧令（くもくりょう）によれば、原則として30里（現在の約16キロメートル）ごとに駅家が設置されていた。

駅家には駅使が往来に必要とする駅馬とその乗具及び駅子が準備され、駅馬を飼育するための厩舎や水飲場、駅長や駅子が業務を行ったり詰めたりするための部屋、駅使が宿泊・休憩を取るための施設および彼らに食事を提供するための給湯室や調理場、それらの施設を運営するために必要な物資（秣・馬具・駅稻・酒・塩など）を収納した倉庫などが設置され、中には楼（駅楼）を備えた施設もあったのである。原則として駅使とその従者のみが駅家の利用を許されていたが、公私の目的を問わず位階・勲位を持つ者が旅行中に駅家で宿泊することは例外的に許されていた。

福島県棚倉町から常陸太田市を通り水戸に至る国道349号線（旧棚倉街道）は 中世棚倉街道である。中世はこの道を通って、奥州に出向いた。この街道沿いには多くの八幡太郎義家伝説がある。なお、義家伝説は官道遺跡と深いかかわりがあることが発掘調査や分布調査で分かっている。

何もないこの山中は1500年も前から自分の領土を守る蝦夷と畿内の豪族であった大和朝廷の領土拡張政策の接点でもあり陸奥、常陸の国境でもあった。

『日本後紀』には、811年には福島県側に高野駅・長有駅を設置したが、翌年には常陸側に雄薩・小田（山田）・田後の3駅家が設置されたと記載されている。

雄薩は小里の事である。奈良時代に書かれた『常陸國風土記』に、「佐都」と「里川」の起こりについて次のように記載されている。

「長幡部(ながはたべ)の社(幡町)から北に薩都の里がある。いにしえに国柄の民(土着の先住民)がいた。名を土雲という。ここに兎上命(うなかみのみこと)は兵をおこして討伐し、土雲を滅ぼした。このとき土雲をすっかり殺して、「幸いかな」と言った。これによって佐都(さつ)と名づけた。」

幸「サチ」から「サツ」とし、その「サ」の音に、二通りの文字をあてている。「薩」と「佐」である。「ツ」はいずれも「都」である。「薩」と「佐」の書き分けに意味はないようである。

駅家の最も可能性がある場所が、大中町であるといわれており、周辺にはいくつかの遺跡もある。

ここには、里平遺跡および古屋敷遺跡、道口遺跡がある。

現在、ここは果樹園や畠になっているが、ここでは、須恵器や土師器が断片だが収集されている。

また、道口遺跡では墨書き土器がでている。さらに、地名に「大路」というのがある。この地名があるところには、官道遺構があるといえる。

また、字古輪<sup>あるわ</sup>と言うこの地域は、城館関係を想像するが、「(クリヤ)」が訛ったものだといい、「クリヤ」は「厨家」であり、駅家の炊事場という意味になる。そうなるとますます、駅家が近くに存在したということになるのである。



## 9. 小里村道路元標

道路元標は道路（現在の国道及び県道）の起点や終点あるいは中間点や経過地を表示する道標で、旧道路法によれば、明治22年に成立した各市町村にはそれぞれ1カ所設置が義務づけされていた。

ふつうは、役場所在地付近の道路の傍に建てられていて、県庁や隣接市町村および県境等までの正しい里程（距離）表示の基準点とされていた。

ところがどうした訳か、小里村の場合は、役場は大字小中に置かれたのに、道路元標は大中集落の宿通りの小里橋と現在の役場入口の中間ほどに、小里街道（旧国道349号線）に沿っての用水路近く、道路西側に建てられている。

これは当時、大津・平潟地方から馬頭・烏山地方（栃木県）へ通じる街道が大中付近で小里街道と交差していたことや、その時すでに小里管内を取扱いとする大中郵便局が、大中宿通りに開局していたためと思われる。

ただ惜しいことには、この明治20年代の賀美・小里両村の成立当時をしのぶ道路元標も旧賀美村のものはいつのころにか失われてしまっていて、現在では確認することが出来ない。



- 〈参考文献〉      「里美村史」
- 「常陸太田市観光物産協会ホームページ」
- 「小森明神調査報告書」
- 「里見村のむかし」
- 「古代東海道と古代の道」